

自由に学び、没頭する中で、 「探究し続ける人」が育つ

変化の激しい社会においては、「学び続ける」ことが求められる。

では、「学び続ける」とは、具体的にはどのような営みであり、「学び続ける人材」はどのような教育によって育成することができるのだろうか。高校時代の探究活動で経験した「最高の失敗」を、東京大学の学校推薦型選抜合格や大学での学びにつなげた大学1年生の歩みをひも解きながら、その恩師の1人である高校教師と有識者とともに、考えていく。



東京大学文科三類1年生
(長崎県立諫早高校卒業)
岸 ふみ

長崎県立諫早高校
後田康蔵

國學院大學
人間開発学部初等教育学科 教授
田村 学

長崎県立諫早高校

設立 1911(明治44)年 形態 全日制・定時制/普通科/共学 生徒数 1学年約280人 2022年度卒業生進路実績 国公立大は、東北大、東京大、京都市大、大阪大、神戸大、九州大、長崎県立大などに203人が合格。私立大は、中央大、東京理科大、早稲田大、立命館大、福岡大、長崎国際大、長崎純心大などに延べ140人が合格。

専門は教科教育学、教育方法学、カリキュラム論。文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、同省同局視学官などを経て、現職。



岸さんの探究活動
そのプロセスと
内面に生じた変化

グリーンウォッシュの原因が 自分の中にあることに気づく

探究学習では、規格外として廃棄されるみかんのアップサイクル(創造的再利用)に取り組みました。地元・長崎の特産品で、私も大好きなみかんが、日本で最も多く廃棄される果物と知り、その問題を解決したいと考えたのです。

私は、廃棄みかんの皮から抽出した精油で香りつけたキャンドルの製造に着手しました。当初は、自分の興味を追究して社会貢献できることに夢中になりました。ところが、農家の方にみかんの買い取り金額が低いことを謝った際、「どうせ『ゴミ』だからね」と言われて、小さな違和感を覚えました。今の活動では、「規格外品は『ゴミ』という価値観に変化を起させていない、創造性を認めてもらえていないと感じたのです。完成した商品は完売し、活動は国内外の大会で複数の賞を受賞しましたが、違和感は残り続けました。

その時のモヤモヤした気持ちに向き合うきっかけとなったのは、大学生の先輩から投げかけられた、「本当に環境への配慮になっている活動なの?」という問いでした。改めて調べてみると、農作物を畑に廃棄することに環境負荷

なぜ、「失敗」は豊かな学びへとつながったのか

2回目の探究サイクルだから 見えてくるものがある

田村 自らに問い続けて、探究が深まっていく岸さんの学びに感動しました。地域の方と語り合うなど、体験を通じて本質的な学びを重ねたからこそ、自分の活動の意味を問い直し、課題を更新することができたのでしょう。農家の方とのやり取りや先輩の言葉など、様々な体験が本当に豊かな学びにつながっていることが見て取れます。

後田 岸さんの活動では、農家の方の何気ない言葉が最高の一次情報となり、それがきっかけとなって気づきをもたらしました。私たち教師は言葉を厳選して授業を進めていますが、活動を通して岸さんの成長を目のあたりに



して、教師の言葉は生徒にどこまで届いているのだろうか、自問しました。

田村 岸さんの活動を尊重し、さらにそこから自身が学ぼうとされる後田先生の謙虚な姿勢が、岸さんの学びを生み出す背景にあるのだと思います。

岸 後田先生の言葉で心に残っているのは、「PDCAサイクルを1周回して、次のサイクルを回そうとしているんだね」というひと言です。1周目のサイクルでは、モヤモヤした気持ちを抱きながら活動をしていましたが、その経験があったからこそ、2周目のサイクルにおいて、活動のどこに問題があるのかを分析して、より深い探究につながれたのだと、自分の現状を整理することができました。

夢中で楽しんだ探究が、 教科学習に結びついていった

田村 一定の時間とともに、自分で選択して行動できる自由度が確保されていると、興味・関心がより高まって新たな問いが生まれたり、他者に話を聞いたりしたくなるものです。そうした環境が整っていたからこそ、岸さんは

2周目の探究のサイクルに入れたのでしょう。活動と授業の両立でも忙しかったはずですが、これほど頑張れた理由は何だったのでしょうか。

岸 純粋に活動が楽しかったからだと思います。忙しかったのは事実ですが、やりたいという気持ちが強くて、「馬鹿力」を発揮できました。

田村 時間に余裕があれば必ずしも理解や定着が進むとは限らず、短時間でも全力で集中することが、本人の能力の開発には重要だと思います。岸さんの活動は、日常生活を豊かにするだけではなく、教科学習にも好ましい影響があったのだろつと推測します。

岸 この先、大学などで学び続けるためには、基礎学力が不可欠であるという思いがあり、授業よりも活動の方が大事だとは考えていませんでした。活動を進めるに連れて、活動が教科学習と結びつく感覚もありました。例えば、みかんの皮の蒸留に関する論文で化学の賞を受賞しましたが、当初は自分の探究が化学の領域のものという認識はありませんでした。活動を機に、あまり得意ではなかった化学の勉強を頑張りたいという気持ちになりました。

はほとんどなく、一方、廃棄みかんの運搬で排出されるCO₂や、製造に用いる電力や水を考慮すると、アップサイクルをする方が環境負荷が大きいことが分かりました。つまり私の活動は、環境に配慮した取り組みのように見えて実態が伴っていない、「グリーンウォッシュ」だったのです。

私は、この失敗の原因を、「規格外品の廃棄は悪」、「農家は困っているはず」といったバイアスによるものだと考えました。そして、「環境意識の高い中高生が善意を持ってグリーンウォッシュに陥る原因に関する質的研究」という論文を作成し、東京大学の学校推薦型選抜に出席して合格しました。

大学では、集団内の規範やそこから生じるバイアスと自分との間の境界線を保ちながら、他者や物事を正しく理解する力である「自他分離的な共感性」について研究したいと考えています。



規格外のみかんの皮むきイベントには21人の高校生、大学生が参加。自分の手で触って、食べ、考えた。

「ROKU」というブランドを立ち上げ、キャンドルを販売。すべて天然由来の素材を使用して製造した。

「学び続けること」「考え続け、探究し続けること」

生涯学習社会から、生涯「探究」社会へ

田村 岸さんのお話から、これからも学び続けるという強い意志が伝わってきます。社会が成熟して、少子高齢化や地域活性化といった、多様で複雑な問題に直面する中で、生涯学習社会から生涯探究社会へと変化していく必要があると考えます。一人ひとりが生涯にわたって自分のできる範囲で探究し続けることで、そうした問題が解決に向かう可能性があるからです。その意味では、「学び続ける」とは「考え続ける」、「探究し続ける」、あるいは「問い続ける」と言い直した方がよりしっくりくるかもしれません。当然、学校でもそうした学びが今後一層求められますし、習得や活用から、いかに探究へとつなげるかを考える必要があります。

ない理由は調べましたが、そもそも「廃棄することは問題か」という思考は全くなかったのです。そんな私に「学び続ける力」が身についたとしたら、その転機は、自分の活動がグリーンウォッシュだと気づいて気落ちしたことでした。1年半にわたって全力で取り組んだ活動を自分で否定するのはとても苦しいことでしたが、その経験があったからこそ、クリティカルに考える力が育ったのだと思います。失敗することの意味・価値を身をもって学びました。

自らに問いを向ける中で、自己を真に信頼していく

後田 活動中の岸さんは、決して自信満々には見えませんでした。恐らく、常に自分に何かを問いかけたり、他者の批判を受け入れたりする姿勢があり、よい意味での「不安定さ」があったのだと思います。自転車は不安定だからこそペダルをこぎ続けないと前に進めないように、自分が不安定であると認められる人が、学び続け、探究し続けられるのだろうと、岸さんの姿か

ら学びました。

私は生徒に対して、探究学習が行き着く理想の形は、思い込みや社会の深い矛盾に気づくことだと伝えていきます。岸さんは問い続け、考え続けたことで、「最高の失敗」を経験し、そうした気づきを得たのだと思います。

田村 岸さんは活動に真剣に取り組んでいたが故に、先輩の言葉が大きなインパクトを持ち、本質を突き詰めようという思いに突き動かされたように見えます。そうした自分の内面に起こるギャップや違和感は、問い続けるための重要なエネルギーになります。他者からよい評価をされることなど

も、もちろん後押しにはなりますが、本当の自信は、自己承認や自己信頼によって醸成されると考えます。「本当に意味のある活動なのか」、「私のやりたいことは何なのか」などと考え続ける中で、次第に確固たる自信が芽生えます。教師にできる支援という観点からは、パフォーマンス評価なども活用しながら、生徒が変容するプロセスを見取っていくことが、これからは一層大切になります。プロセスを見取り、生徒自身の自己評価を教師が理解するという意味でも、後田先生を始めとする諫早高校の先生方がそうしたりフレキションを支え続けたことは、岸さんが探究を深める上で大きな支援になったと思います。



探究学習で「最高の失敗」を経験した時、生徒は思い込みや社会の矛盾に気づく

探究し続ける人を育てる学校とは

情報があふれる社会で 学校は学びの管制塔となる

後田 実は探究が意味することが自分の中では曖昧でしたが、今回の対話を通じて、「主体は自分だ」という自覚を持って取り組むのが探究である」と、明確になったように思います。そうした、探究し続ける人材を育てる学校とは、授業以外の時間は生徒の自由を最大限に尊重する学校だと思えます。自由を尊重することで生徒の個性が具現化され、集団の中に多様性がつくり出されます。そうした場をつくるためには、教師は学びの主体は生徒にあると考え、例えば面談の場では、教師がインタビューするような姿勢で謙虚に生徒に向き合い、生徒の考えを引き出すことが求められます。

岸 様々な学問に詳しい先生がもつているとよいと思います。とこののは、複雑な課題意識がどの学問につながるのかを、生徒だけで説明するのは難しいからです。私が関心を抱いた「共感性」が、仏教など、様々な分野に関連していると気づいたのも、後田先生から薦められた書籍がきっかけでした。

後田 1つの課題でも、様々な学問が複雑に絡んでいますからね。文理選択などを始めとして、従来の進路指導は、課題を単純化し過ぎていたのかもしれない。

田村 学びは豊かで多様なものだからこそ、私は、バランスがキーワードになると考えます。まず、習得と探究のバランスです。教科の専門家である教師が効果的な教科学習を展開することで、探究との相乗効果が生まれるでしょう。加えて、言葉と体験のバランスも重要です。これまでの学校は、言葉や記号を学ぶことを重視する傾向が強かったですが、地域の住民などに話

を聞くといった体験も重要な学びの要素です。体験を言語化することで学びは深まりますから、言葉と体験が調和した学びが大切だと考えます。

後田 「巨人の肩の上に立つ」という言葉があるように、先人の知恵は探究学習においても必要です。ただし、単に知識を与えるのではなく、先人が何を疑問に感じ、どのようにして知恵を生み出したのかを追体験できる授業をして、生徒がそうした授業の中でどのように変化したのかを見取っていきたいと思っています。そのためには、教師自身も探究し続ける必要がありますし、そうした自分の姿を、学び続ける

ロールモデルとして生徒に示していきたいです。

田村 ICTの普及などを受けて、学校の存在価値を問う声もありますが、生徒が活用できる知識や情報が爆発的に増えるからこそ、生徒の学びの自律を支援する管制塔のような存在がますます重要になるでしょう。そうした存在であるのが学校であり、カリキュラムや学習内容などの教育の専門性を持つ教師が、生徒一人ひとりの学びに寄り添うことで、学び続ける生徒が育つのだと思います。学校は、多様な他者が存在するからこそ、豊かで協働的な学びが生まれる場でもあります。現場の先生方が築いてきた豊かな学校文化の価値は、より一層高まっていくと考えます。



習得と探究、
そして言葉と体験。
学校や教師が
多彩な学びの管制塔に

「学び続ける人材の育成」のために、学校はどのような実践をしていけばよいのか――。

「学び続ける人材の育成」のためには、教師が生徒の変容を見取ることが大切です。8月号以降では、本コーナーに登場いただいた田村教授の解説による学習評価をテーマとした新連載を予定しています。ご期待ください！